

---

# ホール

空気な男

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホール

### 【Nコード】

N6298Q

### 【作者名】

空気な男

### 【あらすじ】

ふとしたきっかけで異世界の穴に飛び込んでしまった主人公たち。彼らを待ち受けていたのは、異世界で繰り広げられる争いだった。意図せずその渦中に放り込まれる二人。やがて、逃れられない戦争へと足を踏み入れてしまうのだった。

果たして彼らは、無事に元の世界に戻ることができるのだろうか。彼らの戦いはこれからだ！

## プロローグ

いつものように学校に行くと、道の真ん中に穴が開いていた。ぼくは友人の浩樹と一緒に、その大きな穴の中をのぞいていた。

「あれ？昨日まで、こんな穴は無かったはずなのに、どうして？」

「ぼくだって知らないよ。こんなんじゃない誰も通れやしない」

そう言う浩樹は、近くにある石ころを、穴へ投げ入れた。

……カコンツ……

当たり前だが底はあるようだ。底なしの穴のように見えたのだけれど、どうもそうではないらしい。ただ、落ちたら確実に死ぬる。そう思えるだけ深い穴だった。

「…深いな」

「…ああ、深いな」

「どうする？」

「どうにもならんべ…」

そういいながら、ぼくたちは穴の底をひたすら眺めつづけていた。

「カコンツ！」

「いてえ！」

ふいに、小さな石ころが僕の頭に降ってきた。いや、降ってきたんじゃない。この穴から石が飛び出してきたようである。

「なんだよ、このっ」

僕は、なぜこんな目に遭うんだろうかなと考えながら、石ころを拾う。

「これ、さっきの石ころじゃないか？」

浩樹がそういった。

確かに、そう言われればそんな気もする。けれど、石ころは石ころだ。それが特別な石ころなら見分けがつくが、今落としたのはそのような石ころではない。また、そのような石ころがそこらへゴロゴロしているわけもない。

「まさか…」

「あっ！」

ふいに、僕たちの目の前から、見覚えのある車が走ってきた。西村教諭のランサーだった。先生は僕らに一瞥すると、穴の方に向かっていき…そして落ちた。

「まじかよ、やばくないか…」

「いや、俺たちは悪くないぞ、絶対に」

「前方不注意な先生が悪いさ」

僕たちは口々にそう言った。

だがしばらくして、穴からランサーが飛び出てきた。そしてすぐ向うの道へ着地した。一度、車は止まる。西村教諭が出てきた。

「お前たち何を道草食っているんだ。さっさと学校に行きなさい」

「だって先生」

「穴が開いていますよ」

「ん？何を言っている？」

西村教諭は、不思議そうな顔をしている僕たちを眺めて、そして言った。

「何処に穴なんてある？」

「え？」

僕と浩樹が見ているこの大穴が、教諭には見えていないのだ。

「まあ、穴だかなんだか知らんが、早く学校に行くように」

呆れ顔になり、西村教諭がため息をつく。そして、西村教諭のランサーは走り去って行った。

「いてっ」

不意に背中を叩かれた。振り向くと同じクラスにいる坂本さんだった。

「何してんのさ、学校に行かないの二人とも？」

そういつて、ぼくたちの前を通り過ぎ、穴に…落ちていった。

「やばいぞ」

「どっつするっ…」

「ロープはどこだ？」

「いや、警察だ」

あわてふためく僕たち。しかし、坂本さんは西村教諭と同じく穴から飛び出し、軽くムーンサルトと決めて向うの道に着地した。パ  
ンツが見えそうなくらいきわどいアクションだ。

「ねえ、早く来たら？」

「い、いや俺たちは人を待ってるんだ」

「気にせず行ったらどうだ？」

「そう…」

坂本さんは、少しさびしそうに学校へ向って行った。

「なあ浩樹」

「うん」

「なんだか大丈夫じゃないか」

「俺もそう思う」

二人はそんな結論に至った。どうやら穴は、どういう原理かわか  
らないけど、向うの道には着くようだ。

「よしっ」

「行くかっ」

二人はお互いの背中を押しやった。

「!!!」

「いや、ここは浩樹さんが先でしょ？」

「何を言ってるんだよ。大丈夫じゃないかと言ったのはお前だろ。お  
前が責任とれよ」

もみくちやになって僕と浩樹は譲り合う。だれが喜んで、こんな  
大穴に飛び込むものだろうか。

しかし

「危ない！」

と、だれかが言った。声がする方を振り向くと、車が僕らをひこ  
うとしていた。よけようと前に進む、だが前方は穴だ。

「あっ！」

二人は落ちた。

どんどん落ちる。

どんどん。

どんどん。

どんどん…

ドスツという音が聞こえた。地面に軽くたたきつけられる音。

「いてえ」

どうやら命は助かったようだ。

「ここはどこだろう。いったいどうなってんだ？」

着いた場所は、街灯も何も無い、ただただ真っ暗な闇の世界だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6298q/>

---

ホール

2011年10月6日10時53分発行